同志社大学
2017年度卒業論文

ソーシャルキャピタルとアルバイト満足度
「弱い紐帯の強さ」の研究

社会学部社会学科
学籍番号：19141063
氏名：佐藤美香
指導教員：立木茂雄
（本文の総文字数：21441字）

要旨

論題：ソーシャルキャピタルとアルバイト満足度―「弱い紐帯の強さ」の研究

学籍番号：19141063

氏名：佐藤美香

近年、ブラックバイトが社会問題となるなど、大学生とアルバイトを取り巻く環境が重要視されている。また、多くの大学生にとって、大学生活の中でアルバイトに費やす時間の割合は大きなウェイトを占める。よって、本研究では、このアルバイトの満足度の要因について研究する。その要因として、「弱い紐帯の強さ」が関係するのではないかと考えた。ネットワーク論の中でも、弱い紐帯と大学生との関係に焦点を当てた研究は、あまりなされていない。そこで本研究では、その弱い紐帯に焦点をおき、この分野の代表的研究である Granovetter(1973)の「弱い紐帯の強さ」を主軸に、弱い紐帯の強さの作用する新しい変数を提唱することを目的とした。アルバイト満足度は、先行研究と同じく労働市場である。それ故、先行研究を基に、ソーシャルキャピタルの理論を用いて独自の尺度を作成し、大学生を対象に質問紙調査を行った。

結果、先行研究 Granovetter(1973)と同様に、「弱い紐帯の強い学生ほど、アルバイト満足度が高い」という結果が得られ、研究の目的は達成された。

キーワード：ソーシャルキャピタル、アルバイト満足度、弱い紐帯

目次

1　はじめに.....1
1.1　研究の背景.....1
(1)大学生アルバイトの現状.....1
(2)ネットワーク研究の現状.....1
(3)実体験と問い.....1
1.2 先行研究.....2
(1)社会関係資本.....2
(2)人的資本の形成における社会関係資本.....2
(3)スモールワールド問題.....3
(4)連結型ソーシャルキャピタルと測定方法.....4
(5)弱い紐帯の強さ.....5
(6) 日本のジョブマッチングと弱い紐帯.....6
1.3 目的と意義.....7
2　方法.....7
2.1 調査概要.....7
(1)調査方法 7
(2)質問紙の流れ.....7
2.2 尺度の作成.....10
(1)3形態のソーシャルキャピタル.....10
(2)紐帯の強さ.....11
(3)アルバイト満足度.....12
(4) 手続き.....13
3 結果.....13
3.1 単純集計.....13
(1)回答者の属性.....13
(2)アルバイトに関して.....14
3.2 相関分析.....15
(1)3形態のソーシャルキャピタルとアルバイト満足度.....15
(2)アルバイト満足度（主観・客観）.....17
(3)アルバイト紹介者との紐帯の強さとアルバイト満足度.....18
(4)人を通じたアルバイト就業有無とアルバイト満足度.....18
3.3 分散分析.....18
(1)関係性 、就業頻度.....18
(2)入学方法、お住まい.....19
(3)性別、学年.....19
3.4 重回帰分析.....19
4 考察.....20
4.1 相関分析の結果に関して.....20
4.2 分散分析の結果に関して.....21

4.3 重回帰分析の結果に関して.....21
5 結論 21

参考文献、URL

1　はじめに

1.1　研究の背景

(1) 大学生のアルバイトの現状

近年、大学生とアルバイトに関して、残業代不払いなどのブラックバイトが叫ばれ、大きな社会問題となっている。厚生労働省(2015)による大学生約 1000 人を対象にしたアルバイトに対する意識調査によると、学生 1000 人が経験したアルバイト約 1,961 件のうち 48.2%（人ベースでは 60.5%）が労働条件等で何らかのトラブルがあったと回答している。トラブルの中では、シフトに関するものが最も多い。中には、賃金の不払い、労働時間が 6 時間を超えても休憩時間がないなど法律違反の恐れがあるものもあった。学生 1,000 人が経験したアルバイト延べ 1,961 件のうち 58.7%が、労働条件通知書等を交付されていないと回答した。労働条件について、学生が口頭でも具体的な説明を受けた記憶がないアルバイトが 19.1%であった。このように、大学生を取り巻くアルバイトの問題は深刻である。

また、多くの学生にとってのアルバイトは、大学生活の中で大きなウェイトを占める存在の一つである。ベネッセ教育総合研究所(2016)による大学１～４年生約 5000 人を対象とした生活時間の調査によると、2016 年の一週間あたりのアルバイトに費やす平均時間は、7.7 時間であった。これは、「インターネットや SNS」の週平均 8.5 時間に次ぐ多さである。これは調査を始めた 2012 年からのこの 4 年間で週当たり 1.2 時間の増加している。また、大学生活の中でアルバイトに力をいれたか、という質問で、「とても力をいれた」もしくは「まあ力を入れた」と答えた学生は、約６４％であった。

これらより、大学生にとってアルバイトとは、多くの学生にとって生活の中で大きな存在感を示している。これら二つを受け、大学生にとって、良いアルバイト先、即ち満足度の高いアルバイト先を見つけることは極めて重要であるといえる。故に、このアルバイト満足度の要因の検討には、社会的意義がある。よって、本研究では、アルバイト満足度に影響を与える変数について検討していきたい。

(2) ネットワーク研究の現状

昨今、グローバル化や情報社会化など様々な要因から人間関係が多様化している。故に、その実態を分析する手がかりとなるネットワーク論を研究する必要性があるといえる。その中でも、インターネットの普及などにより、人と人との広い結びつきが更に広がっている。人とのつながりである社会関係資本についての研究は既に多くなされているが、中でも広い結びつきである「弱い紐帯の強み」に着目し、大学生との関係性について研究されているものは少ない。よって、それに着眼点を置いた本研究には、社会学的意義があると考える。

(3) 実体験と問い

本研究においての筆者の個人的な研究背景としては、M Granovetter(1973)による「弱い紐帯の強さ」の理論があることを本学の講義で学び、非常に強い関心を持ったことが挙げられる。それは、次項にて詳述するが「弱い紐帯が強いほど、良い転職先が見つかる」という研究である。関心を持った理由は、筆者が大学生活を送る中で、まさにこの理論が当てはまる経験をしていたからだ。具体的には、筆者がアルバイトを探している際に、仲の良い友達ではなく、関係性の薄い人から、自分に合う良いアルバイト先を紹介してもらったという実体験である。これを受け、本研究のリサーチクエスチョンでは、弱い紐帯と大学生のアルバイトの関係性を研究したいと考えた次第である。以上より、本研究のリサーチクエスチョンは、「弱い紐帯が強い大学生ほど、アルバイト先の満足度が高い」と設定する。なお、研究当初は、Granovetter(1973)の研究結果のように、「弱い紐帯が強い大学生ほど、良いアルバイト先を見つけられるのか」との仮説を立てていた。しかし、「良いアルバイト先」とは何をもって「良い」と定義できるのかが曖昧なため、より尺度化に相応しいと思われる「アルバイト先の満足度が高い」へと変更した。

1.2　先行研究

本研究を行う上で参照した 6 つの先行研究を以下に示していく。

（1）社会関係資本

最初に、弱い紐帯について検討するにあたり、その根本の理論である社会関係資本の理論を確認する。この社会関係資本すなわちソーシャルキャピタルという概念は、RD Putnam(1995）によると、革新主義時代の実践的改革者として知られる、ウェストバージニア州農村学校の指導主事である L・J・ハニファンによって最初に用いられた。ネットワーク、規範、信頼などが持つ社会生活上の特徴を示すものであり、共有された目的を追求するために、より効率よく参加者が共に行為することを可能にするものである。そして、個人的側面と集合的側面、私的な顔と公的な顔がある。つまり、社会関係資本とは私財であり、かつ公共財でもあるのである。また、社会関係資本は、そのような形式の多様性の中でも「結束型」（あるいは排他型）と「橋渡し型」の区別が最も重要である。結束型の社会関係資本は、メンバーの選択やあるいは必要によって内向きの指向を持ち、排他的なアイデンティティーと等質な集団を強化していくものである。これは、特定の互酬性を安定させ、連帯を動かしていくのに都合がよい。一方、橋渡し型の社会関係資本は、より広いアイデンティティーや互酬性生み出すことができるものである。外部資源との連繋や、情報伝播において優れている。つまり、「結束型社会資本が、社会学的な強力接着剤なら、橋渡し型社会関係資本は社会学的な潤滑剤」（RD Putnam 1995＝2006：20）といえるのである。

RD Putnam(1995）は、「強いアメリカを支えた市民的つながりの減少は、いつ・どこで・なぜ起こったのか」についての検討を行った。その結果、様々な人と人のつながり＝社会関係資本が、幸福な暮らしと健全な民主主義にとっていかに重要かを膨大な調査データから立証することができたのである。

（2）人的資本の形成における社会関係資本

次に、先述の社会関係資本の概念を使って、人的資本の創出に着目し、高校の中途退学者を分析した研究を参照する。JS Coleman（1988）は、学校を取り巻く大人たちのコミュニティにおける家族内の社会関係資本と、家族外の社会関係資本いずれもが高校中退の可能性を減少させるうえで大きな有効性をもつ、ということを明らかにした。本稿では、その中で前提として説明されていた社会関係資本の形態についての説明に着目する。

Coleman（1988）は、前提として、社会関係資本には、恩義と期待、情報チャンネル、社会規範の 3 形態があると説明している。恩義と期待とは、例えば A が B のために何かを行い、A は、将来 B がそれに報いてくれると信頼しているとする。これにより、A には期待が生まれ、B には恩義が生まれる、という仕組みである。情報チャネルとは、社会関係に内在する情報に対する潜在力のことである。情報は、行為をもたらす基盤となる点で大変重要である。しかし、情報を獲得するにはコストがかかる。少なくとも、情報に対して注意を払っていることが必要であるが、充分な注意が払われていない状態であることが常である。そこで、情報を獲得する手段の一つは、別の目的のために維持されている社会関係を利用することである。社会規範とは、効果的な規範が存在する場合、それは、強力であるが、ときに脆弱な形態の社会関係資本となる、ということである。集合体内における指令的な規範は、それによって人は自己利益的行動ではなく、集合体利益のために行動できるのである。つまり、社会からの支持、名誉、地位、その他の報酬によって強化されたこの種の規範は社会関係資本であり、この社会関係資本が若い国民を鍛え上げる、ということである。ただし、そのようなある領域に存在する効果的な規範が、別の領域の革新性を低下させてしまうことや、人に便益をもたらすような逸脱行為を減少させてしまう、という側面もあると JS Coleman（1988）は述べる。

（3）スモール・ワールド問題

次に、ネットワーク論の中でも非常に有名で興味深い研究である、スモール・ワールド問題（Stanley Milgram　1967）の理論についてみていく。Milgram(1967)によると、スモール・ワールド問題とは、「世界中の人間の中から X さんと Z さんという二人を取り出した時、両者を媒介する知人を何人連結すればこの二人がつながるか」という問いのことである。ただし、この問いを検討する上では、X と Z が、直接の知り合いではないとしても共通の知り合い Y がいる可能性がある、という点も考慮しなければならない。この、X が Y を知っていて、Y が Z を知っているということを、知人の連鎖と呼ぶ。

研究として、Milgram(1967)は、無作為に選ばれた二人の人間を連結する一連の知人のつながりを追跡する実験を企画した。ここでは、２者間のつながりが実際に作られる過程は、A から Z へと向かう一方的なものであると仮定した。A はこの一連の流れを開始する人であるから起点人物、Z は到達されるべき人なので目標人物と呼んだ。実験方法は、以下の通りである。暮らしぶりの多様な男女のサンプルを手に入れ、その人たち全員に米国のどこかに住んでいる同一の目標人物の名前と住所を教えた。そ

して、参加者全員に友人と知人の連鎖だけを使って目標人物を目指してメッセージを送り渡してほしいと依頼した。実際には、カンザス州およびネブラスカ州の住人の中から無作為に抽出した約 300 名（起点人物）に手紙を渡し、直接面識のない、遠隔地であるマサチューセッツ州のボストンの受取人（目標人物）まで届けるように依頼した。

その結果、Milgram(1967)によると、媒介者となった知人の数は２～10 とばらついてはいたものの、最短の連鎖はわずか２であり、その中央値は５であった。移動した距離を考えると、ある意味 5 人の媒介者という中央値は驚きである。これにより、アメリカのどこに住んでいても、無作為に選ばれた個人の間を連結するには、平均して 5 人の媒介者がいれば充分である、ということが明らかになった。ただ、この参加者の背後には、500 人から 2500 人に及ぶ膨大な人々の群が控えていることを忘れてはならない。つまり、参加者には各自 500 人から 2500 人にのぼる知人がおり、参加者はそのなかから、連鎖を進めるという目的にとって最良の位置にいると思う人物を選択する。故に、Milgram(1967)らは、徹底的にふるいにかけられた最終結果だけを相手にしていたのである。また、媒介する知人の数はたった 5 人だというと、起点人物と目標人物の社会的な位置が近接しているような印象を与えてしまう。しかし、これは大きな誤解を招く恐れがある。2 人の人間が 5 人の媒介者を挟んで離れているということは、実はこの二人は極めて遠く離れていることを意味する。例えば、アメリカ合衆国の住民は殆ど誰でも大統領に、ごく少数の連結で到達できる距離にいるが、実際に彼らが大統領の生活に関わりを持つようになるわけではない、ということである。したがって、起点人物と目標人物の心理的距離は大きいのである。それ故我々は、二つの点が 5 人の人間を挟んで隔たっていると考えるべきではない。むしろ、5 つの「知人圏」を挟んで、あるいは５つの「構造」を挟んで隔たっていると考えるべきなのである。

以上のように、スモール・ワールド問題は、アメリカ全体の大規模人口から無作為に選ばれた人々の間の連鎖を創出して見せ、「私たちはみな緊密に編まれた社会的な織物のなかにしっかりと織り込められているのだ」（Stanley Milgram 1967＝2006 : 117）ということを実証した理論であるといえる。

（4）連結型ソーシャルキャピタルと測定方法

そして先述の通り、Putnam(1995）によって、社会関係資本すなわちソーシャルキャピタルには「結束型」と「橋渡し型」の 2 形態があることが明らかにされている。だが、ソーシャルキャピタルには更にもう一つの形態が存在する。それは、「連結型」である。DP Aldrich(2012)は、災害復興におけるソーシャルキャピタルの役割の研究を行った。その中でこの 3 つ目の形態についても検討している。連結型ソーシャルキャピタルとは、「社会における明確な権力や形式的な権力、また制度的な権力、もしくは権威勾配を超えて交流する人々の間のネットワーク」1)（Szreter and Woolcook 2004: 655）によって成り立つものである。また、Aldrich(2012)はつぎのように説明している。

結束型ソーシャルキャピタルによってつながる近隣住民や親族の関係や、橋渡し型ソーシャルキャピタル)によってつながる別の民族のグループの知人との関係のように、　　結束型ソーシャルキャピタルおよび橋渡し型ソーシャルキャピタルが主に同じ程度の社会的立場同士の関係であるのに対して、連結型ソーシャルキャピタルは垂直方向の関係を考慮に入れる。（Aldrich 2012＝2015:47）

つまり、連結型ソーシャルキャピタルとは、一般の人々には距離のある、権力を行使できる地位にいる権力者や意思決定者らとつながっていることを示すのである。本研究では、大学生においても、このような垂直方向のつながりを持つ者がいる可能性があると判断し、この第 3 形態のソーシャルキャピタルについても検討することとする。

また、Aldrich(2012)は、ソーシャルキャピタルの測定方法についても言及している。Aldrich(2012)によれば、ソーシャルキャピタルを定量的に捉える方法は、4 つある。1 つ目は、人々の感じ方に焦点を当てるものである。これは、個人が有する主観的な信頼の水準の測定である。例えば、「一般的に言って、ほとんどの人は信頼できると思いますか、それとも人と関わるときには用心するに越したことはないと思いますか」というような質問がなされる。これは、回答者が持っている他者の行動に対する期待水準を調べるためのものである。2 つ目は、人々の行動に焦点を当てるものである。例えば、「出かけるときに家の鍵を開けっぱなしにしているか」「よく人にお金を貸すか」などが挙げられる。そして、献血、お金が必要な人に無利子でお金を貸す、など他者中心的な行動を普段からしている人々は、高い水準のソーシャルキャピタルを持っていると考えられる。3 つ目は、活動への参加に着目したものである。投票、ボランティア団体、そして政治的な抗議行動といった活動への参加が含まれる。これは、市民的規範や地域の人々との結束を捉えようとするものである。4 つ目は、信頼ゲームなどの実験によって社会の選好を捉えようとするものである。Aldrich(2012)は、投票率、政治活動への参加、地域祭事への関与、地域外組織とのつながりなど入手可能な代理変数を使用している。

本研究では、大学生のソーシャルキャピタルを測るにあたり、この Aldrich(2012)の測定方法を、尺度を作成するうえでの手がかりとする。

（5）弱い紐帯の強さ

次に、本研究で検討したいと考えている「弱い紐帯の強さ」の根本となる理論を参照する。その代表的研究者である M Granovetter(1973)は、二者間の紐帯の強さがマクロレベルでどのような影響をもたらすのか、という社会的ネットワーク分析を行った。この分析の上で Granovetter(1973)が提示する重要な用語を 3 つ挙げる。まず、「紐帯の強さ」とは、共に過ごす時間量、情緒的な態度、親密さ（秘密を打ち明け合うということ）、助け合いの程度、という 4 次元を組み合わせたものである。次に、「ブリッジ」とは、ネットワーク内の 2 点間をつなぐ唯一の経路となる線のことで、いわゆる紐帯である。そして「自分と異なる属性や資源を持つ他者との結びつきが、自分の持ちえない情報、資源、財などの獲得を促す役割を示す「橋渡し機能」がある。

Granovetter(1973)は、ネットワーク分析として、労働市場の研究を行った。アメリカのブルーカラー労働者の転職先を見つける手段についての研究である。研究方法としては、ボストン郊外に居住し、最近転職した専門職、技術者、管理職の人々からランダムに抽出したサンプルのうち、知人を通じて新しい仕事を見つけた人に、知人が彼に仕事情報を伝えてくれた時期の前後に、その知人とどれくらいの頻度で会っていたのかを尋ねた。これを、紐帯の強さとして測定したのである。一般的に考えれば、強い紐帯で連結された相手は、仕事情報を提供して相手の力になってあげたいという気持ちが強い人たちである。この動機の強さ説に対抗するのは、構造論的な議論である。即ち、弱い紐帯に連結している人々は、自分自身の交際圏とは異なる交際圏に参入している可能性が高く、それ故自分が入手している情報とは異なる情報に接しているだろう、ということである。Granovetter(1973)の研究の結果よると、情報の接触相手は、大学時代の古い友人、かつての同僚や雇い主だった人など、たまに接触する程度の関係が維持され、現在の知人ネットワークの周辺部かろうじて含まれる人であるケースが多かった。多くの場合、そのような紐帯はそもそも初めからあまり強いものではなかった。仕事関連の紐帯に至っては、回答者のほとんど全員がその接触相手に仕事外で会ったことが一度もないと答えてさえいた。

以上のように、Granovetter(1973)は、転職する際に、労働者は強い紐帯を持つ人よりも、弱い紐帯を持つ人から役に立つ就業情報を得られるということを明らかにしたのである。そして、弱い紐帯は、社会移動の機会をもたらす重要な資源であって、社会的凝集性をもたらすものであることを示した。また、弱い紐帯は、個人が機会を手に入れる上で、またその個人がコミュニティを統合される上で、不可欠なものである。強い紐帯は、局所的に凝集した部分を生み出す。故に全体的に見れば、断片化をもたらしていることも主張している。

以上より、この、Granovetter(1973)の研究は、本研究を行う基となる研究である。それ故本研究では、この研究を主軸の先行研究として扱う。

（6）日本のジョブ・マッチングと弱い紐帯

次に、前述の Granovetter(1973)の研究を日本において実施した研究を参照する。渡辺深（1991、2015）は、1991 年、1985 年から 2002 年まで、というように縦断的にこの研究を行った。調査方法は、渡辺（1991、2015）の関わったリクルート・サーチや日本労働研究機構によるエリアサンプリングや層化二段抽出法などで得られたデータの分析である。まず、1991 年の研究では、日本におけるジョブ・マッチング過程で構造変数が果たす役割の考察を行った。ジョブ・マッチング過程とは、「人と仕事はどのようにして出会うのだろうか」ということであると渡辺（2015）は説明する。また、これは渡辺（2015）によると、「異なる属性を持つ労働者を異なる収入や地位をもたらす仕事に結びつける過程」だと定義される。その仮説として渡辺（1991）は、Granovetter(1973)の理論を活かし、「日本の転職者は、強い紐帯よりはむしろ弱い紐帯によって、望ましい転職結果を得るだろう」と設定した。エリアサンプリングである。その結果、驚くべきことに、日本では弱い紐帯よりも強い紐帯が転職において戦略的な機能を持っている、ということが明らかとなった。日本では、構造的特性として、

弱い紐帯の「橋渡し機能」よりはむしろ強い紐帯の「同類原理」が作用していると考えられたのである。

しかし、後の 1985 年から 2002 年までの研究（渡辺, 2015）では、異なる結果が得られた。この調査では、先の調査と同じ内容の検討に加え、17 年間における日本の労働市場の変化は労働者の転職行動にどのような影響を与えたのか、を検討した。その結果、渡辺(2015)によると、日本のジョブ・マッチング過程において、広告、公共職業安定所などの「フォーマルな方法」の台頭による「人的つながり」の活用度の低下、そして、良い仕事をもたらす紐帯は「強い紐帯」から「弱い紐帯」へと変化したことが明らかとなったのである。つまり、日本の労働市場が変化し、失業率及び非正規雇用の増加に伴って、Granovetter(1973)の研究した、アメリカの転職者と同じように、日本でも弱い紐帯の「橋渡し機能」が確認されるようになったのである。その背景として、失業率の増加および非正規雇用の労働者の増加が社会経済的地位の低い集団のメンバー（ヒエラルキー構造の低い位置にいる人々）の増加という構造的変化を意味するならば、全体として、強い紐帯から構成される身近な「内輪」の者同士で情報を共有する従来の「閉鎖型」ネットワークでは転職に役立つ情報が入手しにくくなり、反対に、多くの異なる他者と関係を取り結ぶ「開放型」ネットワークを保持する労働者が望ましい転職結果を得る可能性が高くなると考えられるだろう。このような理由から、2000 年以降、弱い紐帯を用いて、自分の交際範囲とは異なる集団の人々に接近することが望ましい職を得るために必要な手段となったのではないか、と渡辺（2015）は分析する。

1.3　研究の目的・意義

本研究では、Granovetter(1973)の「弱い紐帯の強さ」が作用する新たな変数を発見することを目的・意義とする。中でも、あまり研究のなされていない、大学生と弱い紐帯の強さの関係について明らかにすることに焦点を当てる。Putnam(1995）、Coleman（1988）の研究が示すように、社会関係資本すなわちソーシャルキャピタルには、社会的な有効性がある。そして、Milgram(1967)や Granovetter(1973)によって、その橋渡し機能や情報チャネルとしての有効性が高いことが実証的に確認された。そこで、他にそれを応用できる従属変数を考えるにあたって、弱い紐帯の代表的研究である転職の際の弱い紐帯の強さ(Granovetter, 1973)と同じ労働である「アルバイト」に着目し、先行研究の理論を活かして独自の研究を行う。アルバイトは多くの大学生が経験しているものであり、その見つけ方には転職活動と同じように個々人によって様々なプロセスがあり、その人的つながりの影響も大きいと考えられる。また、先述したように、大学生活におけるアルバイトの存在も大きく、ブラックバイトなどが問題視される中、満足度の高いアルバイトに就業することは、学生にとって重要である。そこで、「弱い紐帯が強い大学生ほど、アルバイト先の満足度が高いのではないか」という問いを設定した。

本研究では、この弱い紐帯の強さを実証するにあたり、その根本となるソーシャルキャピタルの理論を用いる。故に、まず、大学生のもつソーシャルキャピタルを測定

する。そして、Putnam(1995）や Aldrich(2012)の研究が示す、「結束型」「橋渡し型」「連結型」という 3 形態のソーシャルキャピタルのうち、どれが大学生のアルバイト満足度に最も影響を与えているのかを検証する。そして、人を通じたアルバイト経験のある人には、そのアルバイト紹介者との紐帯の強さを尋ねる。また、インターネットの発達した現在では、求人サイトからアルバイトを見つける人も多い為、人からアルバイトを紹介してもらったことのある人は少ない可能性がある。以上の理由から、Granovetter(1973)のように、転職の際に人を介して就職した経験のある人のみを調査対象とするのではなく、現在・過去を含めたアルバイト経験のある人全員を対象とする。これにより、大学生のもつソーシャルキャピタルを測定し、中でも弱い紐帯である橋渡し型ソーシャルキャピタルがアルバイト満足度に作用するのか、を明らかにする。

構成は、次の通りである。最初に本章において、研究の背景と先行研究を基に目的の設定を示す。第 2 章では、調査の概要と方法を説明する。第 3 章では、単純集計と結果の分析を行う。第 4 章では、得られた分析結果の考察を行う。最後に第 5 章では、本研究の結論、課題について述べる、という構成である。

2　方法

2.1　調査概要

（1）調査方法

本研究では、大学生を対象にし、質問紙調査を実施した。2017 年度秋学期の同志社大学の講義内、サークルのメンバーや友人への調査協力依頼を行い、データを収集した。

（2）質問紙の流れ

実施した質問紙の流れについて説明する。最初に、全員に対し、アルバイト経験の有無を聞く。本研究の調査対象は、アルバイト経験者であるからだ。但し、データの信頼性を確保する為、1~3 日間の極短期間のものは除いた。次に、調査対象者の「結束型」「橋渡し型」「連結型」の 3 形態のソーシャルキャピタルを測定する。そして、人を通じたアルバイトの就業経験の有無を尋ねる。就業経験が有ると回答した者に限り、そのアルバイトを紹介してくれた人との紐帯の強さや関係性を尋ねた。そして、再び、調査対象者全員に、アルバイト満足度、外部要因となる可能性があると考え就業頻度について質問をする。ここで尋ねるアルバイトとは、人にアルバイトを紹介してもらった経験のある人にはそのアルバイトについて、紹介してもらった経験のない人には、現在もしくは過去の主なアルバイト先一つについて回答してもらった。最後に、調査票回答者全員を対象に、学年や性別、入学方法やお住まいなど回答者の属性についての質問をして終える。以下の表 1 において質問紙の流れを示す。

表１　質問紙の流れ

	質問項目	回答該当者
q1	アルバイト経験の有無	全員
q2_1	見知らぬ人には注意するに越したことはない	アルバイト経験者（q1で有りと答えた人）
q2_2	プライベートで、頻繁に会っている人がいる	
q2_3	いつも同じ人と行動している	
q2_4	人と狭く深い付き合いをしている	
q2_5	友人は、自分と似たタイプの人が多い	
q2_6	所属集団への帰属意識が強い	
q2_7	家族との仲は深い	
q2_8	情報は、親しい友人から入手することが多い	
q2_9	心から信頼する人がいる	
q2_10	役に立ちたいと思う親しい人がいる	
q2_11	一般的に人は信頼できる	
q2_12	国内の旅先や見知らぬ土地で出会った人を信頼できる	
q2_13	知り合いは多いほうだ	
q2_14	人と広く浅い付き合いをしている	
q2_15	顔見知り程度の人にも自分から声をかける	
q2_16	交流の場に積極的に参加する	
q2_17	年に1.2回程度会っている人がいる	
q2_18	年代の離れた人と交流する機会がよくある	
q2_19	外国に住んでいる人と交流がある	
q2_20	ボランティア活動に自分から参加する	
q2_21	プライベートで役員(取締役や執行役員)と話す機会がある	
q2_22	プライベートで国家公務員と話す機会がある	
q2_23	地方議員と話す機会がある	
q2_24	国会議員と話す機会がある	
q2_25	国際NGOのメンバーと交流がある	
q3	人を通じたアルバイトの就業有無	アルバイト経験者（q1で有りと答えた人）
q4_1	アルバイト紹介者との接触頻度	人を通じたアルバイト就業経験のある人（q3で有りと答えた人）
q4_2_1	自分にとってなくてはならない存在である	
q4_2_2	今後会うことがなくても構わない	
q4_2_3	その人を見かけたら、自分から声をかける	
q4_2_4	その人には何でも話せる	
q4_2_5	自分からその人と会おうとする	
q4_2_6	その人には恩がある	
q4_2_7	その人のために何かしてあげたいと思う	
q4_2_8	自分はその人の役に立っていると思う	
q4_3	アルバイトの紹介者はどれに該当する存在か	
q4_4	アルバイトの紹介者とどのように知り合ったか	
q5_1	自分に合っている	アルバイト経験者（q1で有りと答えた人）
q5_2	働いて楽しい	
q5_3	アルバイト先の雰囲気がいい	
q5_4	アルバイト先に向かうのが憂鬱である	
q5_5	自分の仕事の意義を感じる	
q5_6	このアルバイトを人に薦めたい	
q5_7	人間関係で困ったことはない	
q5_8	バイト先に対し、不満を感じる点がある	
q5_9	今後も続けたいと思う	
q5_10	交通費が支給される	
q5_11	食事支給がある	
q5_12	無賃労働がない	
q5_13	通いやすい距離である	
q6	アルバイトの就業頻度	アルバイト経験者（q1で有りと答えた人）
q7_1	学年	全員
q7_2	性別	
q8	入学方法	
q9	お住まい	

2.2　尺度の作成

調査を実施するにあたり、3 形態のソーシャルキャピタル、紐帯の強さを測る独自の尺度を作成した。その過程を以下に示す。

（1）3 形態のソーシャルキャピタル

Putnam(1995)、Aldrich(2012)の先行研究により、ソーシャルキャピタルには、「結束型」「橋渡し型」「連結型」の 3 形態があることがわかった。故に、本研究では、大学生における、この 3 形態のソーシャルキャピタルを測ることにした。尺度の作成にあたり、先行研究の項で先述した Putnam(1995)、Aldrich(2012)によるそれぞれのソーシャルキャピタルの定義、それに加え Aldrich(2012)によるソーシャルキャピタルの測定方法を基にした。手続きとしては、まず概念を設定した。それは、「信頼」「付き合い・交流」「社会参加」「権力とのつながり」である。これをもとに、3 形態のソーシャルキャピタルに合わせて、筆者自身で尺度を設定した。作成した結束型ソーシャルキャピタルの尺度を表 2～4 に示す。

表 2　結束型ソーシャルキャピタル尺度

	質問項目	概念	回答選択肢
q2_1	見知らぬ人には注意するに越したことはない	結束型SC(信頼)	あてはまる～あてはまらないの4件法
q2_2	プライベートで、頻繁に会っている人がいる	結束型SC(付き合い・交流)	
q2_3	いつも同じ人と行動している	結束型SC(付き合い・交流)	
q2_4	人と狭く深い付き合いをしている	結束型SC(付き合い・交流)	
q2_5	友人は、自分と似たタイプの人が多い	結束型SC(付き合い・交流)	
q2_6	所属集団への帰属意識が強い	結束型SC(付き合い・交流)	
q2_7	家族との仲は深い	結束型SC(付き合い・交流)	
q2_8	情報は、親しい友人から入手することが多い	結束型SC(付き合い・交流)	
q2_9	心から信頼する人がいる	結束型SC(付き合い・交流)	
q2_10	役に立ちたいと思う親しい人がいる	結束型SC(付き合い・交流)	

表 3　橋渡し型ソーシャルキャピタルキャピタル尺度

	質問項目	概念	回答選択肢
q2_11	一般的に人は信頼できる	橋渡し型SC(信頼)	あてはまる～あてはまらないの4件法
q2_12	国内の旅先や見知らぬ土地で出会った人を信頼できる	橋渡し型SC(信頼)	
q2_13	知り合いは多いほうだ	橋渡し型SC(付き合い・交流)	
q2_14	人と広く浅い付き合いをしている	橋渡し型SC(付き合い・交流)	
q2_15	顔見知り程度の人にも自分から声をかける	橋渡し型SC(付き合い・交流)	
q2_16	交流の場に積極的に参加する	橋渡し型SC(付き合い・交流)	
q2_17	年に1.2回程度会っている人がいる	橋渡し型SC(付き合い・交流)	
q2_18	年代の離れた人と交流する機会がよくある	橋渡し型SC(付き合い・交流)	
q2_19	外国に住んでいる人と交流がある	橋渡し型SC(付き合い・交流)	
q2_20	ボランティア活動に自分から参加する	橋渡し型SC(社会参加)	

表 4　連結型ソーシャルキャピタル尺度

	質問項目	概念	回答選択肢
q2_21	プライベートで役員(取締役や執行役員)と話す機会がある	連結型SC(権力との繋がり)	
q2_22	プライベートで国家公務員と話す機会がある	連結型SC(権力との繋がり)	
q2_23	地方議員と話す機会がある	連結型SC(権力との繋がり)	あてはまる～あてはまらないの4件法
q2_24	国会議員と話す機会がある	連結型SC(権力との繋がり)	
q2_25	国際NGOのメンバーと交流がある	連結型SC(権力との繋がり)	

表 2 の結束型ソーシャルキャピタルにおいては、「信頼」「付き合い・交流」の概念を採用し、「帰属集団への帰属意識が強い」「友人は、自分と似たタイプの人が多い」など閉鎖的で同質性の高い交流、結束の高さを測る尺度を 10 個作成した。表 3 の橋渡し型ソーシャルキャピタルにおいては、「信頼」「付き合い・交流」「社会参加」を採用し、「顔見知り程度の人にも自分から声をかける」「ボランティア活動に自分から参加する」などの開放的で異質性のある交流、広い結びつきや社会に対し積極的に関与しようとする姿勢を測る尺度を 10 個作成した。表 4 の連結型ソーシャルキャピタルにおいては、「権力とのつながり」を採用し、「プライベートで役員(取締役や執行役員)と話す機会がある」「国際 NGO のメンバーと交流がある」など大学生が通常では接触する機会が滅多にない、社会的地位や権力のある人とのつながりを測る尺度を 5 個作成した。回答選択肢は、「あてはまる＝１」「どちらかといえばあてはまる＝２」「どちらかといえばあてはまらない＝３」「あてはまらない＝４」の 4 件法を採用した。

（2）紐帯の強さ

先行研究(Granovetter, 1973)の紐帯の強さの定義を参考に、各概念を測定する為の尺度を自ら作成した。Granovetter(1973)は、「紐帯の強さとは、ともに過ごす時間量、情緒的な強度、親密さ(秘密を打ち明けあうこと)、助け合いの程度、という 4 次元を（おそらく線型的に）組み合わせたものである」（Granovetter 1973＝2006:125）と定義している。これを受け、本研究では、「接触頻度」「情緒的な強さ」「親密さ、信頼の程度」「助け合い」という 4 概念を設定することにした。「接触頻度」関しては、Granovetter(1973)の測定方法を採用する。それは、「『頻繁に会う＝少なくとも週 2 回以上』、『ときどき会う＝年 2 回以上かつ週 2 回未満』、『めったに会わない＝年 1 回以下』」（Granovetter 1973:125）である。本研究では、インターネットの普及した現在であるということを踏まえ、これに加えて「会ったことはない＝インターネット上のみのつながり」を追加した。その他の「情緒的な強さ」「親密さ、信頼の程度」「助け合いの程度」に関しては、概念に基づき自身で作成した。結果、合計 8 個の尺度ができた。回答選択肢は、ソーシャルキャピタルと同様に「あてはまる＝１」「どちらかといえばあてはまる＝２」「どちらかといえばあてはまらない＝３」「あてはまらない＝４」の 4 件法を採用した。これを以下の表 5 に示す。

表 5　紐帯の強さ尺度

	質問項目	概念	回答選択肢
q4_1	アルバイト紹介者との接触頻度	紐帯の強さ(接触頻度)	頻繁に会う/ときどき会う/滅多に会わない/会ったことはない
q4_2_1	自分にとってなくてはならない存在である	紐帯の強さ(情緒的な強さ)	あてはまる～あてはまらないの4件法
q4_2_2	今後会うことがなくても構わない	紐帯の強さ(情緒的な強さ)	
q4_2_3	その人を見かけたら、自分から声をかける	紐帯の強さ(親密さ・信頼の程度)	
q4_2_4	その人には何でも話せる	紐帯の強さ(親密さ・信頼の程度)	
q4_2_5	自分からその人と会おうとする	紐帯の強さ(親密さ・信頼の程度)	
q4_2_6	その人には恩がある	紐帯の強さ(助け合いの程度)	
q4_2_7	その人のために何かしてあげたいと思う	紐帯の強さ(助け合いの程度)	
q4_2_8	自分はその人の役に立っていると思う	紐帯の強さ(助け合いの程度)	

また、この尺度に加えて、アルバイトを紹介してくれた人との紐帯の強さ以外の側面の関係性を明らかにするために、関係性に関する質問を 2 つ用意した。1 つ目は、q4_3「アルバイトを紹介してくれた人は、あなたにとっていかのどれにあてはまるか」である。回答選択肢は、「両親」「兄弟・姉妹」「親友」「友人」「先輩・後輩」「恋人」「友人の友人」「知り合い」「知り合いの知り合い」「親戚」「隣人」「インターネット上の友人」「その他」の 13 個である。2 つ目は、q4_4「アルバイトを紹介してくれた人とはどのように知り合ったか」である。回答選択肢は、「大学」「高校」「中学以前」「家族・親戚」「隣人」「人からの紹介」「アルバイト先」「習い事」「イベント」「旅行先」「インターネット」「その他」の 12 個である。

（3）アルバイト満足度

アルバイト満足度を測るにあたり、オリジナルの尺度を作成した。手続きとしては、まず「良いアルバイトとはなにか」をテーマに筆者がアイデアマッピングを行った。それによって出てきた複数の項目を似ているものごとに整理した。その際、筆者の主観的判断のみとならぬよう、第 3 者にも同様にグループ分けをしてもらうなどして、慎重にグルーピングを行った。結果、主観（満足・充足）と客観（環境）の 2 グループに分けられた。前者は、「働いていて楽しい」「自分の仕事の意義を感じる」など、本人のアルバイト先に対する満足・充足度を測定する主観的な 9 項目である。後者は、「交通費が支給される」「無賃労働がない」など働く環境を測る客観的な 4 項目である。そして、前項の 3 形態のソーシャルキャピタルと同じように、アルバイト満足度においても回答選択肢は 4 件法を採用した。これを以下の表 6 に示す。

表 6　アルバイト満足度尺度

	質問項目	概念	回答選択肢
q5_1	自分に合っている	アルバイト満足度(満足・充足、主観)	
q5_2	働いて楽しい	アルバイト満足度(満足・充足、主観)	
q5_3	アルバイト先の雰囲気がいい	アルバイト満足度(満足・充足、主観)	
q5_4	アルバイト先に向かうのが憂鬱である	アルバイト満足度(満足・充足、主観)	
q5_5	自分の仕事の意義を感じる	アルバイト満足度(満足・充足、主観)	
q5_6	このアルバイトを人に薦めたい	アルバイト満足度(満足・充足、主観)	
q5_7	人間関係で困ったことはない	アルバイト満足度(満足・充足、主観)	あてはまる～あてはまらないの4件法
q5_8	バイト先に対し、不満を感じる点がある	アルバイト満足度(満足・充足、主観)	
q5_9	今後も続けたいと思う	アルバイト満足度(満足・充足、主観)	
q5_10	交通費が支給される	アルバイト満足度(環境、客観)	
q5_11	食事支給がある	アルバイト満足度(環境、客観)	
q5_12	無賃労働がない	アルバイト満足度(環境、客観)	
q5_13	通いやすい距離である	アルバイト満足度(環境、客観)	

（4）手続き

回収した調査票を厳重に管理し、統計ソフト SPSS を用いて分析を行った。分析を行うにあたり、２つの事前処理を行った。第一に、4 件法の回答選択肢に関して、逆転処理をおこなった。「あてはまる＝４」「どちらかといえあてはまる＝3」「どちらかといえばあてはまらない＝2」「あてはまらない＝1」へと値の再割りあてを行ったのである。ただし、反転項目はそのままにしておいた。

第二に、変数の計算を行い、各項目に対応する得点を作成した。3 形態のソーシャルキャピタルに関しては、q2_1～10 を足し算した「結束型ソーシャルキャピタル得点」、q2_11～20 を足し算した「橋渡し型ソーシャルキャピタル得点」、q2_21～25 を足し算した「連結型ソーシャルキャピタル得点」、それらを合計した「ソーシャルキャピタル合計得点」を作成した。アルバイトの紹介者との紐帯の強さについては、q4_2_1～8 を足し算した「紐帯の強さ得点」を作成した。アルバイト満足度に関しては、q5_1～9 を足し算した「アルバイト主観（満足・充足）満足度得点」、q5_10～13 を足し算した「アルバイト客観（環境）満足度得点」、それらを合計した「アルバイト満足度合計得点」を作成した。これにより、得点が高いほど、ソーシャルキャピタルが高い、紐帯が強い、アルバイト満足度が高い、ということになる。

3　結果

3.1　単純集計

（1）回答者の属性

質問紙調査により、大学生 110 人分のデータを収集した。111 部配布し、無効回答 1 部を除く、110 の有効回答が得られた（回収率＝約 99%）。調査票の配布方法は、講義内にて 2 回実施、残りは筆者の所属するサークルのメンバーや友人らに直接配布した。回答者は、同志社大学、神戸大学、関西学院大学、大阪薬科大学の学生である。

回答者の男女比は、男性 39 人（35.5%）、女性 71 人（64.5%）で女性の割合が大きい。この背景には、調査を実施したいずれの講義も、女性比率の高い社会学部系統の講義の為か、受講者に女性が多かったことがあげられる。また、筆者の所属するサークルは、ハンドベルサークルで女性が 9 割であること、筆者が女性の為、友人の男女比もおのずと女性が高いことがあげられる。

回答者の学年は、2 年生 55 人（50.0%）、3 年生 35 人（31.8%）、4 年生 18 人（16.4%）、それ以上 2 人（1.8%）と 2 年生の占める割合が大きい。これは、いずれの授業も 2 年生から履修可能な講義であった為、1 回生はいなかったこと、少人数サークルの為 1 回生がおらず、友人は 4 回生のみだったことに起因する。

回答者の大学への入学方法は、一般入学 62 人（56.4%）、内部進学 14 人（12.7%）、推薦入学 31 人（28.2%）、編入学 3 人（2.7%）であり、一般入学者の占める割合が最も大きかった。

住まいは、実家 70 人（63.6%）、下宿 40 人（36.4%）で実家生の方が多かった。近年、シェアハウスの流行などで居住形態が多様化していると想定し、両親以外の親族の家、それ以外の家の選択肢を用意したが、いずれも回答した者はいなかった。

⑵ アルバイトに関して

アルバイトの経験の有無は、経験あり 104 人（94.5%）、経験なし 6 人（5.5%）であり、やはり大学生の大半はアルバイト経験があるようだ。アルバイト経験者 104 人の内、人を通じたアルバイトの就業有無は、経験ありが 39 人（37.5%）、経験なしが 65 人（62.5%）であった。人にアルバイトを紹介してもらったことのある人は少数派となった。これは先行研究当初とは違い、インターネットの発達により、求人サイトなどを利用する人が多くなったことが原因だと考える。

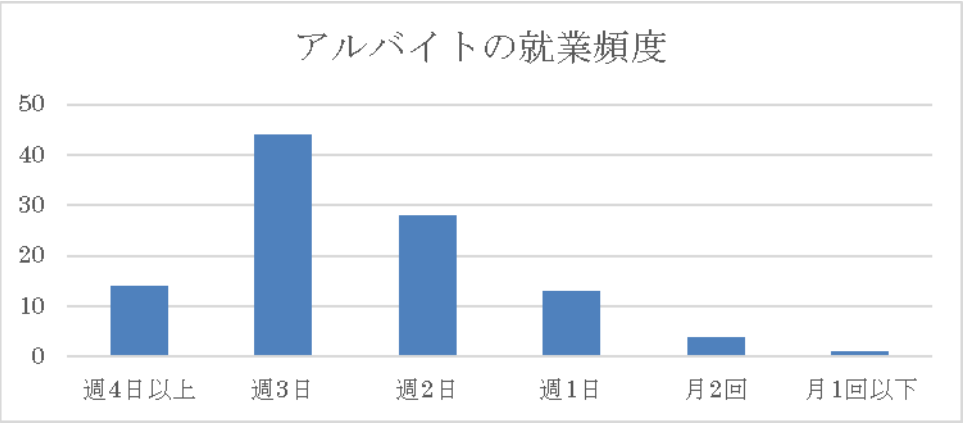

図１　アルバイトの就業頻度

アルバイトの就業頻度を上の図 1 に示した。就業頻度は、アルバイト経験者 104 人の内、週 4 回以上 14 人（13.4%）、週 3 日 44 人（42.3%）、週 2 日 28 人（26.9%）、週 1 日 13 人（12.5%）、月 2 回 4 人（3.8%）、月 1 回以下 1 人（0.1%）であった。週 3 日の学生が最も多く、ついで週 2 日、週 4 回以上と続く。週 3 日以上就業している学生の割合は、55.8%と半数以上にのぼる。ように、ベネッセが示していたように本研究においても、大学生活におけるアルバイトは、多くの学生にとって大きなウェイトを占めるものでありやはりその満足度重要である。

3.2　相関分析

（1）3 種類のソーシャルキャピタルとアルバイト満足度

「結束型」、「橋渡し型」、「連結型」の 3 種類のソーシャルキャピタルと「アルバイト満足度」に相関関係があるのかを検証する。3 種類のソーシャルキャピタル得点、加えてそれぞれの得点を足し算したソーシャルキャピタル合計得点とアルバイト満足度合計得点を用いて相関分析を行った。その結果を表 7 に示す。

表７　3 形態のソーシャルキャピタルとアルバイト満足度の相関分析

	アルバイト満足度
結束型SC得点	.197**
橋渡し型SC得点	.328***
連結型SC得点	.009
SC合計得点	.342**

***：p＜0.01　**：p＜0.1　*：p＜0.5
N＝104

表 7 より、結束型ソーシャルキャピタル得点に関しては、相関係数 0.197 有意確率 0.045 であった。これは、正の相関があり 5%水準で有意であることを示す。また、橋渡し型ソーシャルキャピタル得点に関しては、相関係数 0.328 有意確率 0. 001 であった。これは、正の相関が認められ、1%水準で有意であり、結束型ソーシャルキャピタル得点よりも有意であることを示す。一方、連結型ソーシャルキャピタルにおいては、相関係数 0.009 有意確率 0.924 であり、相関関係がみられなかった。よって、相関分析の結果、アルバイト満足度に対し、最も有意であったのは、橋渡し型ソーシャルキャピタルであるといえる。また、ソーシャルキャピタル合計得点においては、相関係数 0.342 有意確率 0.000 で正の相関があり、1%水準で有意であった。

そして、この 3 形態のソーシャルキャピタルは、本研究において重要な尺度であり、結束型ソーシャルキャピタル、橋渡し型ソーシャルキャピタルにおいて有意性のある相関関係が見られたので、それぞれの回帰プロットである図２～３を以下に示している。結束型、橋渡し型は、右肩上がりのグラフであり、橋渡し型の方がその傾斜

がやや大きい。連結型は直線である。これにより、先述の相関分析の結果である、アルバイト満足度に対し、結束型ソーシャルキャピタルと橋渡し型ソーシャルキャピタルは有意な相関があり、その有意性がより高いのは、橋渡し型ソーシャルキャピタルである、そして連結型ソーシャルキャピタルには有意性がみられない、という結果をより強く証明することができた。

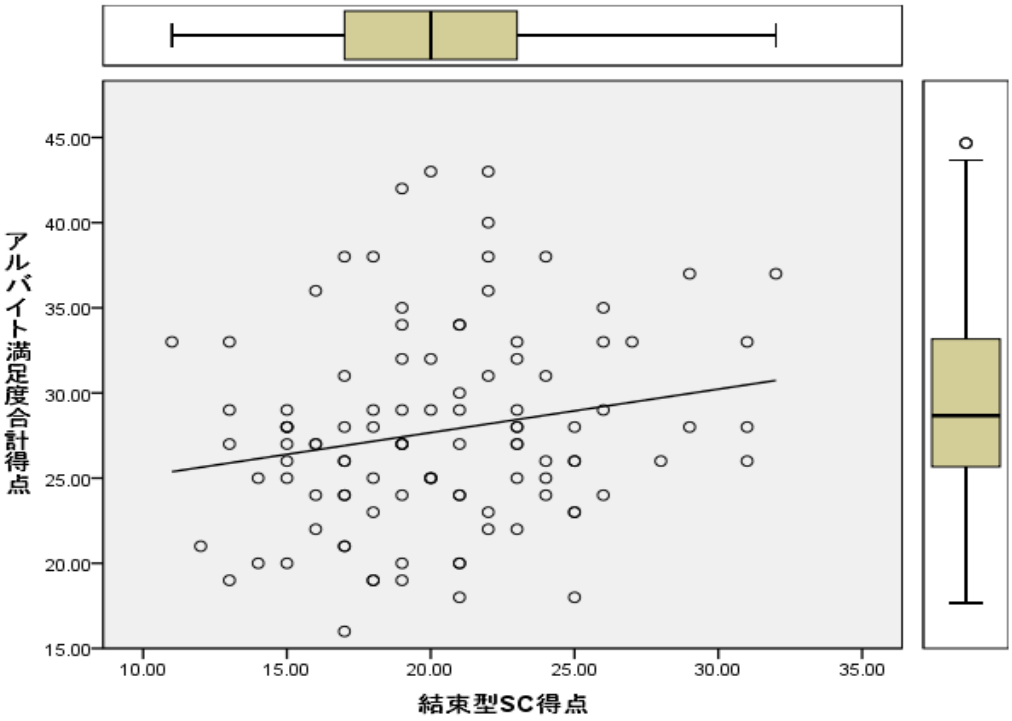

図２　結束型ソーシャルキャピタル得点とアルバイト満足度合計得点の回帰プロット

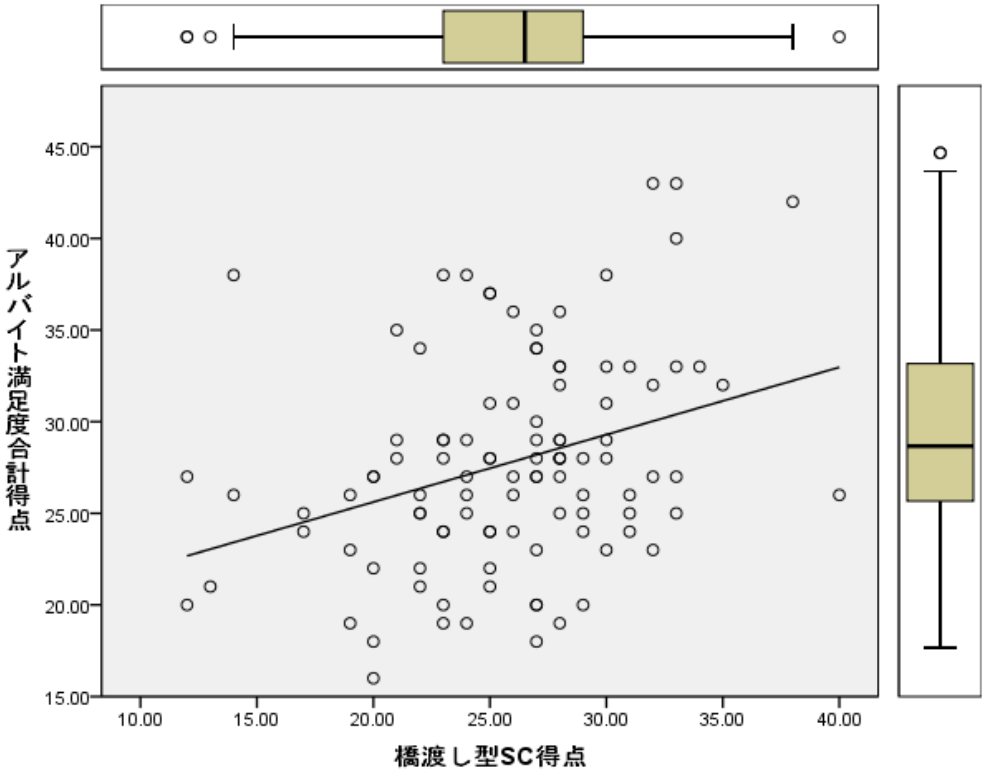

図３　橋渡し型ソーシャルキャピタル得点とアルバイト満足度合計得点の回帰プロット

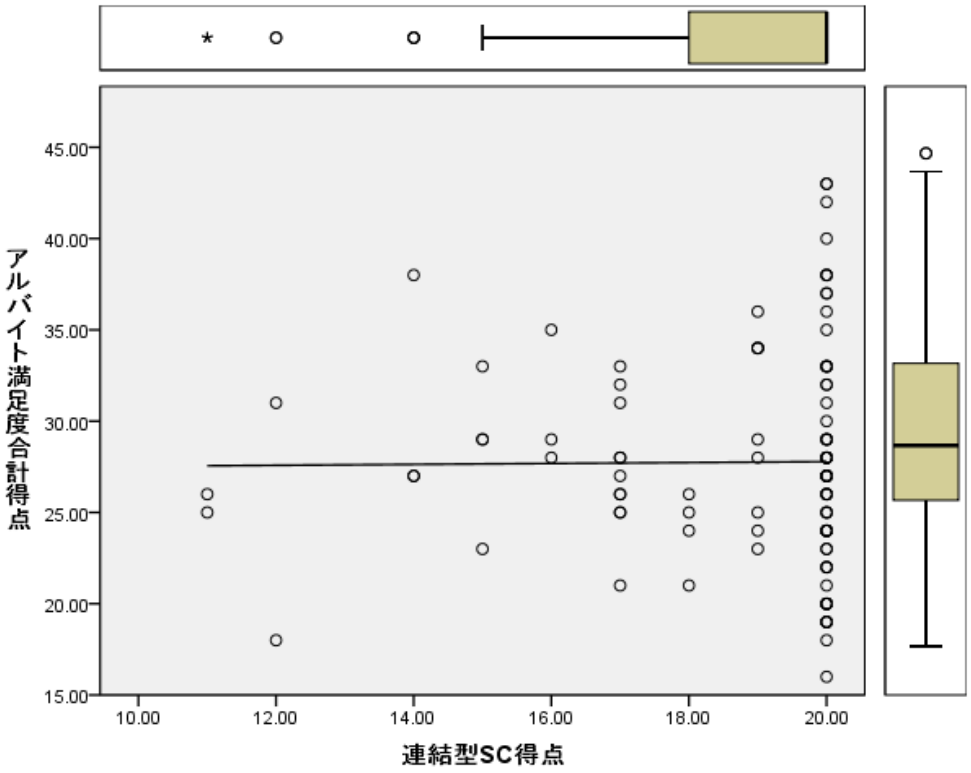

図４　連結型ソーシャルキャピタル得点とアルバイト満足度合計得点の回帰プロット

（2）アルバイト満足度（主観・客観）

そして、最も有意であった「橋渡し型ソーシャルキャピタル」に関して、アルバイト満足度を構成する２つの概念別に再び相関関係を分析した。満足度を概念別に分析しても、その相関関係があるといえるかを確かめるためである。アルバイト満足度は、主観（満足・充足）と客観（環境）の２つの概念によって構成している。この２つの概念ごとに得点化し、橋渡し型ソーシャルキャピタル得点との相関分析を行った。その結果を表８に示す。

表８　橋渡し型ソーシャルキャピタルとアルバイト満足度（主観・客観）の相関分析

	アルバイト主観(満足･充足)満足度得点	アルバイト客観(環境)満足度得点
橋渡し型SC得点	.289***	.260***

***:p＜0.01　**:p＜0.1　*:p＜0.5
N＝104

表８より、主観（満足・充足）満足度得点においては、相関係数 0.289 有意確率 0.003 の相関がみられ、1%水準で有意であった。客観（環境）においては、相関係数 0.260 有意確率 0.008 でこちらも正の相関がみられ、1%水準で有意であった。以上より、アルバイト満足度を概念別にわけて検証しても、橋渡し型ソーシャルキャピタルとの相関関係があるといえる。

（3）アルバイト紹介者との紐帯とアルバイト満足度

アルバイトを紹介してくれた人との「紐帯の強さ」と「アルバイト満足度」との相関分析を行った。紐帯の強さ得点とアルバイト満足度合計得点を用いた。その結果を表９に示す。

表９　アルバイト紹介者との紐帯の強さとアルバイト満足度の相関分析

	アルバイト満足度合計得点
紐帯の強さ得点	.102

N＝39

表９が示すように、相関係数 0.102 有意確率 0.535 であった。わずかながら正の相関はみられたが、有意ではなかった。

(4) 人を通じたアルバイト就業有無とアルバイト満足度

また、q3 において尋ねた「人を通じたアルバイト経験の有無」と「アルバイト満足度」の相関関係をみていく。相関分析を行うにあたり、q3 のダミー変数を作成し

た。手続きとしては、Q3 の回答選択肢は、「経験あり＝１」「経験なし＝２」であるが、値の再割り当てを行い「経験なし＝０」「経験あり＝１」へと変換した。結果を表 10 に示す。

表 10　q3 ダミーとアルバイト満足度合計得点の相関分析

	アルバイト満足度合計得点
q3ダミー	.071

N＝39

表 10 より、相関係数 0.071 有意確率 0.474 であった。わずかながら正の相関はみられたが、有意ではなかった。

3.3　分散分析

次に、「アルバイト満足度」と、「アルバイト紹介者との関係性」「就業頻度」「性別」「学年」「入学方法」「お住まい」の 6 つの変数との関係をみていく。前項で最もアルバイト満足度と相関関係があった橋渡し型ソーシャルキャピタルについて、その他にアルバイト満足度に作用している外部要因が存在していないかを確かめる為である。いずれもアルバイト満足度を従属変数とし、一元配置分散分析を行った。そして、有意であったもののみ表を示した。

（1）関係性、就業頻度

まず、関係性に関する 1 つ目の質問である q4_3「アルバイトを紹介してくれた人は、あなたにとって以下のどれにあてはまりますか」について検討する。用意した 13 個の選択肢のうち、該当する回答があったのは、「兄弟・姉妹」「親友」「友人」「先輩・後輩」「友人の友人」「知り合い」の 6 個であった。分析結果は、有意確率 0.371 と有意性はなかった。そして、2 つ目の関係性に関する質問である q4_4「アルバイトを紹介してくれた人とは、どのように知り合いましたか」について検討する。用意した 12 個の選択肢のうち該当する回答があったのは、「大学」「高校」「中学以前」「家族・親戚」「アルバイト先」「習い事」「イベント」「その他（ボランティア）」の 8 個であった。分析結果は、有意確率 0.934 であり有意性はなかった。

次に、アルバイトの就業頻度について検討する。分析結果は、有意確率 0.148 であり、こちらも有意性はみられなかった。

（2）入学方法、お住まい

入学方法について検討する。q7 の質問であり想定していた選択肢「一般入学」「推薦入学」「内部進学」「編入学」の全てに回答があった。分析結果は、有意確率 0.371 であり、有意性は見られなかった。そして、お住まいについて検討する。q 9 の質問であり、想定していた 5 つの選択肢のうち該当する回答があったのは、「実家」「下宿」の 2 つであった。分析結果は、有意確率 0.234 であり、こちらも有意性は見られなかった。

（3）性別、学年

まず、性別について検討する。q7_1 の質問である。「男性」「女性」ともからの回答が得られた。分析結果は、有意確率 0.112 であり、有意性はみられなかった。そして、学年について検討する。q 7_2 の質問であり、1～4 年生に加え、それ以上の人からも回答が得られた。この分析結果は、表 11 に示す。

表 11　学年を独立変数とするアルバイト満足度の平均値（標準偏差）の分散分析結果

学年	2年生（n=５３）	3年生（n=32）	4年生(n=18)	それ以上（n＝1）	F値	有意確率
アルバイト満足度	26.8113(5.33153)	27.5313(5,75850)	30.6111(6,74004)	33.0000(-)	2.576	.085

N＝104

表 11 より、有意確率 0.085 であり、10%水準で有意であった。

以上より、6 つの変数のうち、有意であったのは、学年のみである。また、その有意性は 10%水準にとどまる結果となった。

3.4　重回帰分析

「アルバイト満足度」と「3 種類のソーシャルキャピタル」に関して、重回帰分析を行った。この目的は、結束型、橋渡し型、連結型の 3 種類のソーシャルキャピタルのうち、従属変数であるアルバイト満足度に対して、最も影響力があるのはどれかを検証する為である。手続きとしては、それぞれのソーシャルキャピタルの合計得点を 3 つの独立変数として、アルバイト満足度合計得点を従属変数として重回帰分析を行った。以下表 12 に示す。

表 12　アルバイト満足度を従属変数とした重回帰分析結果

	非標準化係数		標準化係数
	B	標準誤差	ベータ
結束型SC得点	0.21	0.123	0.162**
橋渡し型SC得点	0.358	0.107	0.319***
連結型SC得点	-0.083	0.256	-0.031

***:p＜0.01　**:p＜0.1　*:p＜0.5
N＝104

表 12 のそれぞれの有意確率を確認する。結束型ソーシャルキャピタル得点は 0.091、連結型ソーシャルキャピタル得点に至っては 0.747 であり、いずれも有意性はみられなかった。一方、橋渡し型ソーシャルキャピタル得点においては、有意確率は、0.001 であり 1%水準で有意であった。以上より、先述の相関分析の結果を合わせてみても、やはりアルバイト満足度に最も影響力があったのは、橋渡し型ソーシャルキャピタル得点であるといえる。つまり、「橋渡し型ソーシャルキャピタル得点の高い大学生ほど、アルバイト満足度が高い」という結果が得られたのである。

4. 考察

前章の結果について、相関分析、分散分析、重回帰分析の結果に関しての筆者の考察を行う。

4.1　相関分析の結果に関して

相関分析の結果に関しては、まず、3 形態のソーシャルキャピタルとアルバイト満足度について Granovetter(1973)や渡辺(2015)の結果と同じように、橋渡し型ソーシャルキャピタルが最も有意な相関があったという結果が得られたことが挙げられる。この背景には、やはり第 1 章でみた先行研究が示すように、橋渡し型ソーシャルキャピタルのその名の通りの橋渡し機能や情報のアンテナとしての機能が作用しているからであろうと考える。そのように、広い結びつきや多様な情報を持っているという強みが、アルバイト満足度にも影響を与えているのだ。これは、まさに Granovetter(1973)の研究と同様の結果であり、「弱い紐帯の強さ」がアルバイト満足度においても発揮されることが実証されたのである。次に、その他の 2 形態のソーシャルキャピタルが橋渡し型ソーシャルキャピタルほどの影響力を持たなかった背景についても検討する。まず、結束型ソーシャルキャピタルは、同質性が高く、狭く強い結びつきである為と考える。それは、アルバイト先を見つけることは、渡辺（2015）のいう異なる属性を持つ労働者を異なる収入や地位をもたらす仕事に結びつける過程であるジョブ・マッチングと似ているからだ。やはり、そのような機会には、結束型ソーシャルキャピタルよりも、広い結び付きで異質なコミュニティにもアクセスし易い橋渡し型ソーシャルキャピタルの方が適しているであろう。また、連結型ソーシャルキャピタルについては、社会に出る一歩手前で、まだまだ人生経験のも浅く、社会人に比べれば一般的に世間が狭い大学生においては、ハードルが高かったようだ。それは、そもそも権力とのつながりを測る項目に対し、「あてはまらない」が大半であったことからもいえる。そして、ソーシャルキャピタル合計得点とアルバイト満足度にも有意な相関があったことから、「ソーシャルキャピタル」と「アルバイト満足度」には深い関係性があるといえる。

そして、アルバイト紹介者との紐帯の強さや人を通じたアルバイトの就業有無と、アルバイト満足度との間に、有意性のある相関がなかったことについて考察する。こ

れに関しては、Granovetter(1973)の理論から考えると、紐帯の強さとアルバイト満足度の間には、有意な負の相関が得られることが理想であった。また、人を通じたアルバイトの就業有無とアルバイト満足度については、Granovetter(1973)の理論から考えると有意な正の相関が得られることが理想であった。この 2 つの結果の背景には、本研究においてのサンプル数の少なさや、尺度の設定に問題があったのではないかと考える。例えば、本研究の総データ数は、110 であるが、その中でも人を通じたアルバイト経験のある人は 39 人しかいない。求人サイトの普及など現在のアルバイトを探す手段を考慮すると、人を通じて探す人の割合が小さいことはわかっていたのでもう少しデータ収集の努力をすべきであった。また、尺度について、本研究では、Granovetter(1973)の就業頻度の尺度を採用したが、これについても、現在の、それも大学生に適した尺度になるよう思考を凝らすべきであった。しかし、全体的に見ると、アルバイト満足度と、弱いつながりである橋渡し型ソーシャルキャピタルとの間に正の相関があることは、実証できたといえる。

4.2　分散分析の結果に関して

分散分析の結果、明らかとなったことは、筆者が想定していた外部要因に関し、有意性があったのは、「学年」のみだということである。学年が有意であったのは、学年が上がるほど、一般的にアルバイトを経験している年数も増えるので、アルバイトに慣れてくること、または、アルバイトを見つけるコツをわかってくる可能性があるからではないかと考える。しかし、その有意水準は、10%である。この背景には、このような外部要因はアルバイト満足度に対し、大きく影響する変数とはなり得ず、やはり、アルバイト満足度に対し、最も影響力があるのは、橋渡し型ソーシャルキャピタルであったからだと考える。

4.3　重回帰分析の結果に関して

重回帰分析の結果、アルバイト満足度に最も影響力があるのは、橋渡し型ソーシャルキャピタルである、ということが明瞭に実証された。つまり、橋渡し型ソーシャルキャピタルを持つ大学生ほど、アルバイト満足度が高いといえる。それは、Granovetter(1973)の先行研究の通り、「弱い紐帯の強さ」がアルバイト満足度において発揮されているからである。

5. 結論

本研究では、Granovetter(1973)の「弱い紐帯を持つ人ほど、良い転職先が見つかる」という研究結果と同様に、「橋渡しソーシャルキャピタルを持つ大学生ほど、アルバイト満足度が高い」という結果が得られた。また、渡辺(2015)の「日本の転職市場においても弱い紐帯の『橋渡し機能』が確認されるようになった」という研究結果と同様に、日本の大学生のアルバイトにおいても、人と人との広く弱いつながりである橋渡し型ソーシャルキャピタルの有効性が明らかとなった。これは、先述の分析の結果、他のどのソーシャルキャピタルや想定した外部要因よりも、アルバイト満足度に対する橋渡し型ソーシャルキャピタルの影響力が大きかったことからいえる。つまり、「弱

い紐帯の強み」（Granovetter　1973)は、大学生のアルバイト満足度においても、発揮されるのである。故に、本研究の目的である、Granovetter(1973)の「弱い紐帯の強さ」が作用する新たな変数を発見すること、を達成することができたのである。これは、本研究において理想としていた大きな成果である。また同時に、3 形態のソーシャルキャピタルの尺度、紐帯の強さの尺度を新たに作成し、実証することができたということも示す。

そして、アルバイトの満足度を高められる一つの要因がわかったということは、ベネッセ教育総合教育研究所（2016）が示すように、大学生活の中で大きなウェイトを占めるアルバイトの時間をより有意義なものする一つの手がかりが発見できたということである。加えて、満足度の高いアルバイト先であれば、ブラックバイトと呼ばれるような劣悪な環境でなく、健全な環境で働けるのでその分学業との両立もはかれ、より充実した大学生活の実現にもつながる。また、橋渡し型ソーシャルキャピタルがあるということは、開放的で広いつながりを持っているので、価値観の多様化、受容性、人脈の広がりなどアルバイトのほかにもメリットが得られる可能性がある。よって、この研究は、大学生や大学にとって、学生の大学生活を充実させる為の手がかりが発見できたという意義もあるといえる。

今回の調査の課題としては、収集データ数が 110 人分と少なかった故、人を通じたアルバイトの就業経験のある人のデータ数を十分に確保できなかったこと、社会調査で理想とされるように男女比率が均等でなかったこと、尺度の作成にもっと思考を凝らすべきであったことが挙げられる。本研究の主軸とする Granovetter(1973)のように、弱い紐帯を使ってアルバイトに就業した人ほど、その満足度が高い、ということが実証されることが一番の理想である。また、今後の展望としては、アルバイト満足度のほかにも「弱い紐帯の強さ」が発揮される変数があるのではないかと考えるので、機会があるならばそれを検討していきたい。

謝辞：

本文執筆にあたり、丁寧なご指導頂いた立木茂雄教授、立木研究室の皆様、調査にご協力頂いた学生の皆様、本当にありがとうございました。

注

1)これは、DP Aldrich(2012)の翻訳本の訳である。DP Aldrich, 2012, *Building Resilience: Social Capital in Post-Disaster Recovery*, The University of Chicago Press.（＝2015, 石田祐・藤澤由和訳『災害復興におけるソーシャル・キャピタルの役割とは何かーー地域再建とレジリエンスの構築』ミネルヴァ書房.）

［参考文献］

DP Aldrich, 2012, *Building Resilience: SocialCapital in Post-Disaster Recovery*, The University of Chicago Press.（＝2015，石田祐・藤澤由和訳『災害復興におけるソーシャル・キャピタルの役割とは何かーー地域再建とレジリエンスの構築』ミネルヴァ書房.）

JS Coleman,1988, “Social Capital in the Creation of Human Capital,”*American Journal of Sociology*, 94:S95-S120.（金光敦訳，2006,「人的資本の形成における社会関係資本」野沢慎司編,『リーディングスネットワーク論 ： 家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房，205－241.）

M Granovetter, 1973, “The Strength of Weak Ties, ”*American journal of sociology*, 78:1360-1380. （＝大岡栄美訳，2006,「弱い紐帯の強さ」野沢慎司編,『リーディングスネットワーク論 ： 家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房，123-158.）

M Stanley, 1967, “The Small-World Problem,”*Psychology Today*, 1;61-67.（＝野沢慎司・大岡栄美訳，2006,「小さな世界問題」野沢慎司編,『リーディングスネットワーク論 ： 家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房，97－121.）

RD Putnam, 1995, “Bowling Alone: America’s Declining Social Capital,”*Journal of democracy*, 6(1): 65-78.（＝2006，柴内康文訳『孤独なボウリング ： 米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房.）

Szreter, Simon, and Woolcock, Michael, 2004, “Health by Association? Social Capital, Social Theory, and the Political Economy of Public Health,” *International Journal of Epidemiology*, 33(4):650-667.

渡辺深，1991,「転職 ： 転職結果に及ぼすネットワークの効果」『社会学評論』42(1) : 2-16,107.

————，2015,「転職とネットワーク: 1985 年から 2002 年までの日本の労働市場におけるジョブ・マッチング過程の変化」『学術の動向 : SCJ フォーラム』20(9) : 20-25.

「URL」

ベネッセ教育総合研究所，2016,「第 3 回大学生の学習・生活実態調査報告書　ダイジェスト版　[2016 年] 」，（ 2017 年 7 月 17 日取得，http://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=5169）.

厚生労働省, 2015,「大学生等に対するアルバイトに関する意識等調査結果について」,（2017 年 7 月 20 日取得，http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000103577.html）.